総合学術研究紀要　第23巻　第１号：17-36（2021）

【研究論文】

琉球諸島における建物遺構に伴う「石組土坑」の特質と変遷

Characteristics and Changes of “Stone Pit” Associated with Building Feature in the Ryukyu Islands

上　原　静
Shizuka UEHARA

はじめに

琉球諸島におけるグスク時代以来の建物跡や集落跡から、多様な形態の石組土坑が確認されている。当該遺構は日本本土復帰前の1965年勝連城跡２ノ郭の基壇内での発見（註1）を嚆矢とする。ところが、永らく類例資料の追加がなく、性格不明な遺構として留意されてきた。しかし、近年の相次ぐ遺構調査から、その機能・用途の一つに廃棄物施設や便所に関わる遺構であることが分かってきた。また同時に、利用する側の使い勝手という汎用性の側面も認められ、未だ検討の余地を残している。このことから、本稿では現段階における機能・用途の見解を確認し、あらためて当該遺構および関連施設（建物）の類型化を図りながら、その特質と消長に迫りたい。本小稿は去る2021年1月26日、沖縄国際大学南島文化研究所主催シマ研究会（付記1）において公表した内容である。

1. 遺構の名称

主題の遺構はいわゆる土坑の一種で、平面形が四角形ないし円形を呈し、その坑内を主として石灰岩礫で囲む中空の遺構を総称する。琉球諸島では、冒頭で述べたようにグスクの舎殿跡内からの発見から始まり、現在では近世集落跡内までと、類似遺構の報告が相次いでいる。遺構の呼称は「方形石積遺構」（註2）、「石組遺構」（註3）、「枡状遺構」（註4）、「方形土坑」（註5）、「井戸状遺構」（註6）、「シーリ遺構」（註7）、「石組土坑」（註8）、「遺物廃棄遺構」（註9）、さらに用途を特定し「便所」（註10）、「溜池」（註11）などがあり、統一されていない。なお、呼称は勿論調査者の認識の反映であるが、時系列的には調査研究の進展も影響しているようだ。本稿では以下、「石組土坑」として論を進める。

写真１　首里城正殿跡

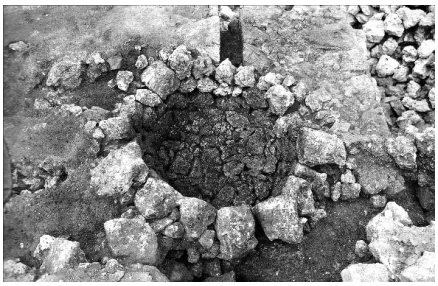


写真２　首里城御内原跡（北地区）

2. 遺構調査小史

本節では遺構の発見報告から現時点までの約55年余の研究の推移を概観し、現段階の到達点と課題を明らかにする。なお本遺構に関する問題意識は発見当時からあるものの、類例資料の蓄積が進まず、停滞した感があった。近年に至り急速に資料の増加が始まったこともあり、体系化の動きは緒に就いたばかりである（付記2）。主な検討は、遺跡調査報告書における所見（見解）で示された。これらを整理するにあたり、日本本土復帰時点を画期として、前後で二期に大別し、さらに、後半は復帰後20年時点から急増に転ずることから、その時期を境に前後で分けて述べたい。

写真３　勝連城跡　2ノ郭

第Ⅰ期　日本本土復帰前段階。1965年勝連城跡の調査報告からすると、1971年日本本土復帰前までの間で、実質7年間である。

第Ⅱ期　1972年日本本土復帰の年から現段階（2021年）までとする。本期はさらにa、bの２期に分けた。

a 期：1972年の本土復帰時点から、1991年の20年の期間。

b 期：1992年の本土復帰30年から現在までの28年の期間。

第Ⅰ期

日本本土復帰以前の時期。1965年琉球政府文化財保護委員会による勝連城跡の遺構調査で発見された。遺構の場所は２ノ郭の舎殿跡で、建物跡の四隅側で礎石の間に挟まるように計４基確認されている。基壇及び階段は２期分確認されている点を考慮すると、当該遺構の数も二分の一を視野に考えることも必要かもしれない。いずれにしても、調査の翌年1966年に高宮廣衛によりその調査成果が速報され、その中において用途不明の方形石積遺構として紹介されている（註12）。琉球諸島における発掘調査件数が僅かで、考古学的調査研究の環境も十分ではなかった時代背景もあり、強い関心はあるものの実態解明の検討は後年に待つところとなった。

第Ⅱａ期

日本本土復帰から後の20年間ほどは、沖縄における遺跡調査体制の整備を目指した段階と思われる。名勝識名園（1977年）（註13）で類似の遺構が報告され、その後、浦添城跡（1984年）（註14）、首里城正殿跡（1986年）（註15）、勝連城跡（1986年）（註16）、首里城歓会門・久慶門跡（1988年）（註17）、今帰仁城跡1の郭（1991年）（註18）とやや断続的に続いた。約20年の間の6例という結果ではあるが、本遺構がグスクや御殿跡に伴うということと、今帰仁城跡例をとおして遺構に円形と方形

の２種類が存在するという知見がもたらされた。また、機能・用途に関しては、首里城歓会門・久慶門内郭の井戸地区で、石組遺構内の下部から自然遺物が確認され、民俗誌のミンタナシーリ（食料残滓廃棄物処理槽）との類似例と、先の勝連城跡や直近の首里城正殿跡の例を挙げその多義性が示唆された。

第Ⅱｂ期

前述のⅡａ期が6件から、支配者層に関わる施設（建物）での発見という限定的なものであったが、本Ⅱb期では報告件数が40余件と急増し、時代の下限が近現代へと広がり、遺構の在り方も多様になっている。以下に時系列で遺跡を示す。

壺屋古窯Ⅰ（1992年）（註19）、カイジ浜貝塚（1994年）（註20）、識名園御殿西側（1996年）（註21）、喜友名集落跡（1999年）（註22）、天界寺跡（2000、21年の）（註23、24）、首里金城村跡（2001年）（註25）、松山御殿跡（2002年）（註26）、円覚寺跡（2002年）（註27）、玉陵東の番所跡（2004年）（註28）、首里旧真和志村（2005年）（註29）、神応寺跡（2006年）（註30）、首里旧大中村跡（2007年）（註31）、渡地村跡（2007年）（註32）、首里城黄金御殿（2007年）（註33）、赤道渡呂寒原屋取古集落（2007年）（註34）、新垣グスク（2007年）（註35）、首里金城村跡（2009年）（註36）、首里城御内原北地区（2010年）（註37）、島添大里グスク（2011年）（註38）、楚名村（2012年）（註39）、中城御殿（2012年）（註40）、渡地村跡（2012年）（註41）、湧田村跡（2013年）（註42）、中城御殿（2013年）（註43）、首里城御内原地区（2013年）（註44）、中城城跡（2013年）（註45）、首里城京の内跡（2014年）（註46）、小禄村跡（2014年）（註47）、首里城銭蔵地区（2015年）（註48）、普天間古集落跡（2015年）（註49）、トリイステーションウガンヒラー南方遺跡（2015年）（註50）、首里崎山村跡（2016年）（註51）、平安山原Ｂ遺跡（2015年）（註52）、首里城正殿跡（2016年）（註53）、中城御殿（2016年）（註54）、中城御殿〈首里高校内〉（2017年）（註55）、東村跡（2017年）（註56）、普天間古集落跡（2017年）（註57、58）、首里城東アザナ北地区（2018年）（註59）、中城御殿（2018年）（註60）、神山古集落跡（2019年）（註61）、大嶺村跡（2019年）（註62）とある。

以上、遺跡の年代は上限がグスク時代にあり、下限は現代（沖縄戦）までとなっている。検出遺構の性格・内容はグスクの舎殿や、王府時代の諸建物、士族の御殿、寺院、平民の屋敷などと、当初の権力者層から漸次平民層まで認識される。また、１遺跡における遺構の存在件数も増加傾向にあり、機能・用途の分別を窺わせるようになってきた。さらに、調査報告例にみる遺構の分布は、グスク時代は沖縄本島圏にあり、近世では首里・那覇地区に集中するが、下って近現代以降では宜野湾市神山古集落跡、宜野湾市普天間古集落遺跡、宜野湾市喜友名集落跡、うるま市楚南村跡、読谷村ウガンヒラー南方遺跡、竹富島のガイジ浜貝塚などのように、調査地域の多寡が反映しているようで、実際には琉球諸島全域に存在していることが示唆される。

機能・用途に関しては、とくに近世以降は便所施設、廃棄物処理施設、水溜施設などとの関わりが鮮明になってきた。用途の特定方法は歴史資料一つである古図および間取図を重ねることで、便所施

第１表　石組土坑関連遺構、出土遺跡一覧表

番号	遺　跡	性格	検出地（建物関係）			遺構（報告記号）	平面形	規模（内法）			床仕様	備考	遺構数	引用文献
								縦	横	深さ				
1	首里城跡	ゲスク・宮殿（15～20世紀）	正殿跡	基壇	建物内	sw1	長方形	2	1.3	1.4	土床		18基	1
						sw2	正方形	1.3	1.1	2	土床			
						sw3	正方形	0.4	–	–	枠破壊			
						sw4	長方形	0.4	1	0.4	石敷			
						sw5	正方形	0.9	0.9	0.3	石敷			
						sw6	正方形	1.3	1.3	1.3	土床			
						sw7	正方形	1	1	0.3	石敷			
						sw8	正方形	–	0.3	–	枠破壊			
						sw9	正方形	0.4	0.3	0.2	石敷			
						sw10	正方形	1.4	1.2	1.3	土床			
						sw11	長方形	1.3	0.8	1.7	土床			
						sw12	正方形	1.5	1.4	1.5	土床			
						sw13	正方形	1.8	1.5	2	土床			
						sw14	正方形	未掲載	未掲載	未掲載				
						sw15	正方形	未掲載	未掲載	未掲載				
						sw16	正方形	未掲載	未掲載	未掲載				
						sw17	正方形	1.2	1.2	1.1	土床			
					建物外	sp3	長方形	4.1	1.4	0.6	土床			
			京の内跡			sd04-b	方形	0.4	0.3	ー			1基	2
			御内原跡	基壇		シーリ遺構	円形	約1.2	約1.1	約0.5	石敷	便槽	1基	3
			黄金御殿跡			石組1	正方形	1.2	1.2	0.7	石敷			4
						石組2	正方形	1.1	1.1	1.2	土床			
						石組3	正方形	1.5	0.9	0.6	土床			
						石組4	正方形	0.7	ー	0.3	土床			
						石組5	正方形	3	1	1.1	石敷			
			東のアザナ			石組1	長方形	1.1	0.4		土床			5
						石組2	長方形	1.2	0.8		土床			
						石組3	方形	1.1	ー		土床			
			銭蔵跡			方形石組	長方形	5.8	1.4	1.1	土床			6
			歓会門・久慶門内郭跡	井戸周辺	建物外	石組遺構	正方形	1.5	1.3	1.3	土床	獣骨出土	3基	7
						第１水槽	長方形	2	1.7	1.3	モルタル	水槽		
						第２水槽	長方形			1.3	モルタル	モルタル		
2	勝連城跡	ゲスク	一の郭	基壇	建物内	拝所	円形	1.5	1.5	1.0	土・岩		1基	8
			二の郭	基壇	建物内	方形石積	正方形	0.9	0.85	未掲載		№1	4基	9
						方形石積	正方形	0.94	0.92	未掲載		№2		
						方形石積	正方形	1.04	0.85	未掲載		№3		
						方形石積	正方形	0.81	0.82	未掲載		№4		
			四の郭			井戸	正方形	2.9	2.6	2.2	土床		1基	10
3	今帰仁城跡	ゲスク	一の郭	基壇		第１号土坑	円形	約1.5	約1.35	約1.5	土床	Ⅳ期	2基	11
				基壇脇		石組遺構	正方形	1.2	1.2	1.2	岩基盤	Ⅱ期		
4	中城城跡	ゲスク	正殿跡	基壇	建物内	石組土坑	方形	0.38	0.42	0.12	土床			12
5	島添大里城跡	ゲスク	正殿跡	基壇	前庭部	石組土坑	方形	約1	約1	0.8	土床		2基	13
					基壇内	石組土坑	方形	1.2	ー	約1.1	土床			
6	浦添城跡	ゲスク	溜め井地区		建物外	溜め井	長方形	4	2	0.4	土床	溜め井	2基	14
						D遺構	円形	0.9	0.9	約1.0	土床			
7	中城御殿（旧博物館）	舘・御殿				石組2	円形	約0.7	約0.6	約1.1			5基	15
						石組4	正方形	破損	約0.2	未掲載				
						円形石組	円形	約0.8	約0.2	約0.4				

						石組1	正方形	約0.7	約0.6	約0.2				16
						石組2	長方形	約1.9	約1.1	約1				
8	識名園御殿	舘・御殿	台所北側			遺構1	長方形	約1.4	約0.5	ー			7基	17
						遺構2	長方形	約0.6	約0.4	ー	排水溜升			
			御殿西側			石組1	正方形	1.5	1.3	0.9	石敷	漆喰		18
						石組2	長方形	2.8	0.5	0.6	土床	切石		
						石組3	長方形	1.2	0.5	0.35 ～ 0.50	石敷			
						石組4	長方形	1.2	0.5	0.5	石敷			
						石組5	長方形	1.3	0.5	0.4	石敷			
9	玉御殿番所	墓番所	東御番所	基壇屋外	建物内	1号石組	長方形	約1.3	約0.7	約0.5	石敷		2基	19
						2号石組	長方形	約0.9	約0.6	約0.2	石敷			
10	中城御殿跡（首里高校）	舘・御殿	Ⅰ区			sm2	正方形	約0.9	約0.9	約0.5	石敷	漆喰	17基	20
			Ⅰ区			sm9	正方形	約0.55	約0.3	約0.25	土床			
			Ⅰ区			sx2	円形	約1.9	約1.7	約0.6	岩盤掘り込み			
			Ⅲ区			sm3	正方形	約0.65	約0.4	約0.3	土床	漆喰		
			Ⅳ区			sm16	正方形	約0.75	約0.5	約1.1	土床			
			Ⅵ区			sm6	正方形	約1.4	約1.2	約0.5	石敷			
			Ⅴ区			sm13	正方形	約1.3	約1.1	約1.5	土床			
						sm25	円形	ー	ー	ー				
						sx14	円形	ー	ー	ー				
						sk51	正方形	約1.7	約1.7	約2.3	土床			
						sk52	正方形	約1.2	約1.1	約0.4	岩盤			
						sm18	正方形	約1	約0.9	約0.6	岩盤			
						sm19	正方形	約1.5	約1.4	約1.75	岩盤			
						sm21	正方形	約1.6	約1.2	約2.2	岩盤			
						sm24	正方形	ー	ー	ー	岩盤			
						sx28	楕円形	約4.4	約1.8	約1.4	岩盤掘り込み			
						sx41	正方形	約0.7	約0.6	約0.4	土床			
11	御茶屋御殿跡	御殿				方形石組	長方形	1.7	0.75	0.5 ～ 1	傾斜石敷		1基	21
12	松山御殿跡	御殿				方形土坑	長方形	1.5	0.7	1.4	土床	17世紀後	1基	22
13	那覇古窯Ⅰ					石組遺構	方形	0.77	0.6	0.6	石敷	№1	7基	23
						〃	方形	0.9	0.8	0.85	石敷	№2		
						〃	円形	0.8	0.71	0.43	石敷	№3		
						〃	円形	0.95	0.42	0.58	石敷	№4		
						〃	方形	約1	0.96	0.35	石敷	№5		
						〃	楕円形	2.74	2.7	0.68	土床	№6		
						〃	方形	0.7	0.5	ー	石敷	№7		
14	湧田村跡	民家	建物隣接			遺物廃棄遺構	方形	約0.9	約0.8	0.1	土床	近世	1基	24
15	首里旧大中村跡	民家				石組遺構	方形	ー	ー	ー	石敷	漆喰	3基	25
						〃	方形	ー	ー	ー	石敷			
						〃	方形	約0.8	ー	ー	土床			
16	首里旧金城村跡	民家	2地点			石組遺構	楕円形	1.1	0.7	ー	石敷	漆喰	3基	26
			〃			〃	長方形	0.8	0.4	0.3	土床	珊瑚板		
			〃			〃	円形	0.6	0.6	ー	石敷	漆喰		
		民家				石組遺構	楕円形	1.2	1	約0.8	土床		4基	27
						〃	長方形	1.2	7.5	約0.4	土床			
						〃	円形	0.9	0.9	1.5	土床			
						〃	楕円形	約1	約1	約0.2	土床			
		民家	G地区				楕円形	未掲載	未掲載	未掲載	石敷		8基	28
							円形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			

			H地区				長方形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			
							楕円形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			
							円形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			
							長方形	未掲載	未掲載	未掲載	石敷			
							円形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			
							楕円形	未掲載	未掲載	未掲載	土床			
17	渡地村跡	民家	BCトレンチ			石組1	正方形	約1.2	約1.1	約1.3	土床		4基	29
						石組2	正方形	約0.6	約0.7	約0.5	土床			
						石組3	ー	約0.8	約0.2	約0.25	礎石？			
						石組4	方形？	約0.7	約0.6	約0.4	土床			
			2 ～ 5地区、ＢＣ地区			石組1	円形	約1	約1	約0.9	岩盤		2基	30
						石組2	円形	約1.5	約1.5	約0.9	岩盤			
						石組1	正方形	約1.2	約1.2	約0.4	土床			
						石組2	正方形	約0.7	約0.9	約0.5	土床			
18	東村跡	民家	王府関連施設			sk1	正方形	1.1	約0.65	約0.4	土床		8基	31
						sk13	正方形	1	0.7	約0.6	岩盤			
						sk19	正方形	1.3	0.9	約0.5	土床	獣骨類		
						sk86	正方形	1.5	1.4	約0.2	土床			
						sk87	正方形	1.4	1	約0.4	土床			
						sk88	正方形	1.75	1.4	約0.3	土床			
						sk136	円形	0.8	約0.2	約0.45	土床	グスク時代		
						sk89	正方形	1.4	約1.3	約0.3	土床			
19	小禄村跡	民家	建物隣接			石組	方形	0.8	0.7	0.5	土床		1基	32
20	首里旧真和志村跡	民家	地点3			石組	方形	約0.5	約0.5	未記	土床		5基	33
			地点4		フール接	石組1	円形	1.6	1.4	未完	漆喰塗装			
			〃			石組2	円形	1	0.9	未記				
			〃			石組3	方形	約0.7	約0.5	0.27				
			〃			石組4	円形	1.7	1.5	0.3				
21	赤道渡呂寒原屋取古集落跡	民家	2号屋敷跡	フール接		クウェーチブ	方形	約1.1	約0.7	未記			1基	34
22	宜野湾神山古集落	民家	区画1			SK036	正方形	1.2	0.8	0.3	石敷		16基	35
			区画3			SK026	正方形	0.8	1.2	0.3	石敷			
			区画3			SK027	正方形	0.8	1.2	0.3	土床			
			区画3			SK040	正方形	0.8	0.8	0.2	石敷			
			区画4			SK080	正方形	1	1.2	0.5	全面モルタル塗装			
			区画6			SK006	長方形	0.7	1.4	0.4	土床			
			区画6			SK007	長方形	0.6	1.1	0.4	石敷			
			区画6			SK011	正方形	0.7	1.4	0.2	完全モルタル製			
			区画6			SK012	長方形	0.8	1.4	0.6	レンガ、全面モルタル塗装			
			区画9			SK024	方形？	0.8	ー	ー	全面モルタル塗装			
			区画9			SK030	長方形	0.4	0.8	ー	レンガ、全面モルタル塗装			
			区画9			SK031	正方形	1.2	1.2	0.5	全面モルタル塗装			
			区画10			SK023	長方形	1	1.6	0.2	完全モルタル製			
			区画10			SK041	長方形	0.5	0.9	0.2	完全モ三和土			
			区画10			SK050	長方形	0.6	1	0.25	土床			
			区画10			SK039	ー	ー	ー	ー	完全モ三和土			
23	普天間古集落遺跡	民家	区画37			方形石組1	正方形	1.74	1.32	石一個	土床		7基	36
			区画38			方形石組2	長方形	1.95	1.32		全面モルタル塗装			
			区画39			方形石組3	正方形	1.4	1.4	石一個	土床			
			区画43			方形石組4	正方形	1.69	1.46	0.42	床モルタル			
			区画44			方形石組5	正方形	1.59	1.3	0.46	土床			

			区画44			方形石組6	長方形	2.5	1.72	0.65	床モルタル			
			区画44			方形石組7	長方形	1.11	0.61	0.15	床モルタル			
24	喜友名貝塚・喜友名グスク	民家	Ⅱ地区	フール接		シーリ	正方形	ー	ー	ー			1基	37
25	カイジ浜貝塚					石囲い遺構	正方形	1.18	0.9	0.4	漆喰塗装		1基	38
26	天界寺跡	寺院	東地区	三殿内屋敷跡		1号石組	正方形	0.6	0.7	0.7	漆喰塗装		4基	39
						2号石組	正方形	0.5	0.5	0.2				
						1号便所	長方形	0.4	0.9	0.7	漆喰塗装	壁斜め		
						2号便所	長方形	0.4	0.9	0.5	漆喰塗装	壁斜め		
27	神応寺跡	寺院	建物隣接			1号石組	長方形	0.82	0.7	0.58	漆喰塗装		4基	40
						2号石組	正方形	約1.5	約1.5		漆喰塗装			
						3号石組	長方形	1.26	0.64	0.8	漆喰塗装			
						溜井	円形	0.9	0.96	約1	漆喰塗装			
28	円覚寺跡	寺院	龍縁殿	東司跡		石組遺構	方形	0.48	0.48		石敷		2基	41
			庫裏			石組遺構	長方形	2.3	1.9	0.4				

法量：約 m は実測図面からの計測値。
参考文献本文註と同じである。

引用文献（本文参考文献）

1. 註 53 に同じ。2. 註 46 に同じ。3. 註 37 に同じ。4. 註 33 に同じ。5. 註 59 に同じ。6. 註 48 に同じ。7. 註 3 に同じ。
8. 付記 3 に同じ。9. 註 2 に同じ。10. うるま市教育委員会 四の郭発掘調査〈地上露出遺構〉2013 年。11. 註 18 に同じ。
12. 註 44 に同じ。13. 註 8 に同じ。14. 註 11 に同じ。15、16. 註 40、43、54、60 に同じ。17. 註 21 に同じ。
18. 註 21 に同じ。19. 註 28 に同じ。20. 註 54 に同じ。21. 註 6 に同じ。22. 註 26 に同じ。23. 註 19 に同じ。24. 註 42 に同じ。
25. 註 31 に同じ。26~28. 註 25、36 に同じ。29. 註 32 に同じ。30. 註 41 に同じ。31. 註 56 に同じ。32. 註 47 に同じ。
33. 註 29 に同じ。34. 註 34 に同じ。35. 註 61 に同じ。36. 註 57、58 に同じ。37. 註 22 に同じ。38. 註 20 に同じ。
39. 註 23、24 に同じ。40. 註 30 に同じ。41. 註 27 に同じ。
※上記の表には記載していないが、石垣市石垣貝塚から数基検出報告有り。

設、水溜施設が認定されている。また、遺構内の堆積物を理化学的に分析し、糞便や回虫の卵、穀物、果物の種などの検出を踏まえて真相に迫っている。考古学的には出土遺物の内容や堆積土にみる緑～褐色系粘性土の存在、さらに互層性、遺構の形態や製作技法などの状況をもって判断されている。

用途が特定された廃棄物処理施設について、首里城御内原北地区においては、遺構内堆積物の自然科学的分析がおこなわれ、魚獣骨や貝殻類、植物種子、寄生虫卵、糞石、日常生活の器片など、様々生活廃棄物を検出し、いわゆる民俗誌にみるシーリ（肥だめ）に対応させている。なお、調査担当の仲座久宜は、古文献や伝聞を駆使し、トイレ施設と関連する首里城内の暮らしを叙述している。ことに石組遺構の利用形態について、城内では固定的な便所がなく、移動可能な排便箱が利用され、その他の生活残滓やゴミとともに一括廃棄される坑とした。また、それらの消臭には土を被せ、定期的に掻きだし回収する汲み取りの動きを復元している。注目される見解である（註63）。

つぎに、水溜については、民俗学的調査による聞き取りや、考古学的観察（実験考古学）により特定されている。石組土坑の不透水性を高めるため、粘土や漆喰などを用いて内壁面を覆っていることを理由とする。地上水などを集める考慮からか、石組みの上端面は地上面に近いレベルである。実際に降雨後に雨水が溜まり、保持され、床面上の玉砂利の存在理由が解された例がある。また、民俗誌では屋外の活動後の手足や、芋、農具などの粗い泥などを落とす洗い場で、さらに畑などに散水する

貯水目的を記述している。他様ざまな水場の使用が想定される。遺構は浦添城跡、識名園御殿、普天間古集落などで確認されている。

以上、遺構の調査研究の推移を学史として概観し、その内容の機能・用途に関しては、①文献資料(間取図、古地図)との照合、②聞き取り（民俗誌）、③理化学的な分析、④実験的観察など、客観性の高い方法でなされた所見を中心に取り上げた。

３　石組土坑の考古学的検討

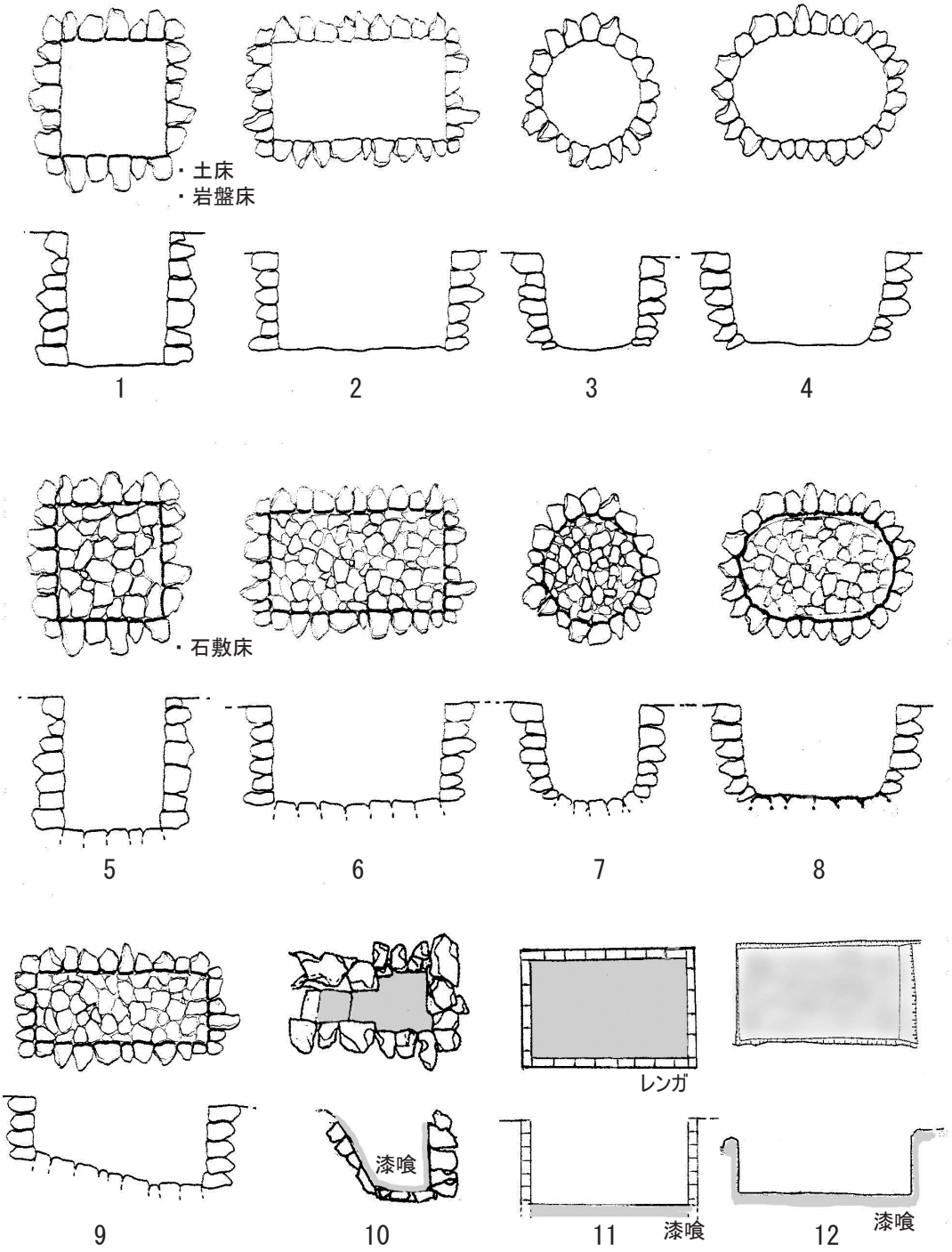
石組遺構の機能・用途の解明にあたり、歴史資料、民俗学的調査、理化学的分析などによるアプローチがあるが、多様なかたちの遺跡と遺構の遺存条件から、上述の接近方法が取れるのは現実的には多くはない。その点でオーソドックスな手法である形態研究が打開策の一つとなるのであろう。以下に分析の諸要素を提示する。

１）石組土坑の分類

集成した石組土坑は、グスク時代から近現代までに属するもの28遺跡、154基を数える(第1表)。遺構の外観は平面が四角形ないし円形で、内部は礫を組み用いて壁面とし、床面に及ぶものと、掘り出し時の自然の土面や岩盤床のものがある。また、明らかに後代になるが、内壁面に漆喰、三和土、モルタル・セメントを塗布したもの、さらには礫の代わりにレンガやコンクリートに置換したものまである。材質などの物質史的にみると、出現から終焉まで追うことが可能な、実に希有な遺構である。以上のことを視野に、当該土坑を①平面形態、②床（底）の形態、③壁面の仕様、④規模から分類を試みた（第１図)。

坑の平面形態　平面形は巨視的に四角型と円型である。細分すると前者はA：正方形、B：長方形で、後者はC：円形、D：楕円形（長円形）の計4種類である。調査報告書記載の呼称は、方形、正方形、長方形などがあり、掲載図には一辺の長さの差や、平行四辺形状、台形状のものも含まれる。したがって本小稿では報告書掲載の実測図から概ね、短辺と長辺の差が40㎝内のものは正方形と許容範囲とみなし、その辺の差が大きいものを長方形と区別する。それを踏まえた結果、出土状況では正方形（52%)、続いて長方形（29%)、円形（15%)、楕円形（3%）という割合になっている。

床（底）の形態　機能・用途に大きく関係するとみられる床面（底）の仕様に注目した。床面はその仕様に違いから4種類に大別した。a：掘り込んだ底面が地床（土面)、b：岩盤床、c：壁面同様に床まで石敷を施す。d：後世の仕事として石組の表面に、漆喰（三和土)、モルタル・セメントで塗装する。これら類型は土床型、岩盤床型、礫敷型、塗装型とする。検出率では、土床型（53%)、岩盤床型（10%)、礫敷型（20%)、塗装型（3%)、他は不明。



第１図　石組土坑類型模式図

1.Ⅰa式　2.Ⅱa式　3.Ⅲa式　4.Ⅳa式　5.Ⅰc式　6.Ⅱc式　7.Ⅲc式
8.Ⅳ式　9.Ⅱc②式　10.Ⅱc③式　11.Ⅱd①式　12.Ⅱd②式

壁面の仕様　内壁を構成する石組みを子細にみると、礫の大きさや加工のあの方、組み上げ方に種類がみられた。礫に関しては、a）石灰岩の20㎝台小礫を中心としたタイプ、b）25㎝以上を中心するタイプで、目地の噛み合せも丁寧になされるタイプに大別される。また、前述の床仕様と同じであるが、礫の表面に、不透水層を意図して塗装したものが登場する。さらなる進化として、素材となる石灰岩礫に代わり、c）レンガや、d）コンクリート材に置き換え、形を維持したものがある。

礫の組み上げ方に関して、検出される石組土坑の殆どのものが、内壁上端部のみが囲繞しているが、勝連城跡２ノ郭の場合は内壁と外壁で構成され、地上に立ち上がっている。そのため外観は井戸の様な形状を呈している。現段階では当例のみで他にはみられない。多くの遺跡にみる石組遺構はほぼ上端が破壊を受けているケースが多く、独立した類型とするかはしばらく待ちたい。

同様に壁面の仕様で、床面からの立ち上がり状況で違いがみられる。縦断面形で分類すると、①垂直をなし枡形をなすものと（85％）、② V字形に開口部が広くなるものがある（7％）。さらに、③四角型の一側面を滑り台状に傾斜を付けたもので、概して床面にも連動して一方向に内容物が移動、溜まるような造形を呈するものがある。

規模　大きさについてみると、正方形は辺が1.82m～ 1m台までのもがあり、ことに1.5 ～ 1m前後の大きさが量的分布の中心をなす。長方形にはバリエイションがみられ、長辺が長軸6m台を測る大型タイプから、小型では40㎝台のものがみられる。円形については、直径1mから1.5mの大きさにおさまる。

なお、石組土坑の深さについては、遺構上部が大方の遺跡で後世の破壊を受けていることもあり、完全形の数値を押さえるのは難しいが、残存計測を上げると1m以上の深いものは20％、浅い状態ものが64％。計測に値しないものが残り16％となる。傾向としてⅠ式に１m以上の深さのものがあり、Ⅱ式になると浅くなる。また、近現代に属するものは概して浅い傾向がみられる。

２）類型とその編年

類型化することにより、系統の存在や、時間軸の差、変遷過程を追うことが可能なる。このことから、基本的部位を見出し新旧（前後）の関係をみてみたい。分類は平面形と床面の要素から、基本４種類の16型式になる。

石組土坑Ⅰ：a方形土床式、b方形岩盤床式、c方形礫敷式、d方形塗装式

石組土坑Ⅱ：a長方形土床式、b長方形岩盤床式、c長方形礫敷式、d長方形塗装式

石組土坑Ⅲ：a円形土床式、b円形岩盤床式、c円形礫敷式、d円形塗装式

石組土坑Ⅳ：a楕円形土床式、b楕円形盤床式、c楕円形礫敷式、d楕円形塗装式

石組土坑の絶対年代が報告されている件数は僅少ではあるが、分類した型式に対応するデータは以

下の通りである。

石組土坑Ⅰa式は、14世紀前半から14世紀半ば（今帰仁城跡1の郭）、15世紀後半から16世紀後半（中城御殿跡“首里高校”）、17世紀以降（東村跡）

石組土坑Ⅲa式は、15前半から17世紀半ば（今帰仁城跡1の郭）、17世紀（中城御殿跡（首里高校））、15世紀中頃から17世紀前半代（東村跡）。

石組土坑Ⅲc式は、17世紀前半から18世紀（首里城御内原北地区）。

以上の結果から、編年上は石組土坑Ⅰa→Ⅲa→Ⅲc→Ⅰ・Ⅱｄ式という新旧関係で押さえられる。換言すると方形が円形に比べ早く登場し、床仕上げも土床から礫敷へと広がりみせている。なお、後尾のⅠ・Ⅱｄ式は土坑内の塗装材、構造体の素材（レンガなど）、坑内出土資料などから明らかに明治時代以降に位置付けられることによる。こうして大筋はみえるものの、各型式の細かな動きについてはデータ不足によるもので、資料追加を待ちたい。

３）石組土坑の型式とその性質

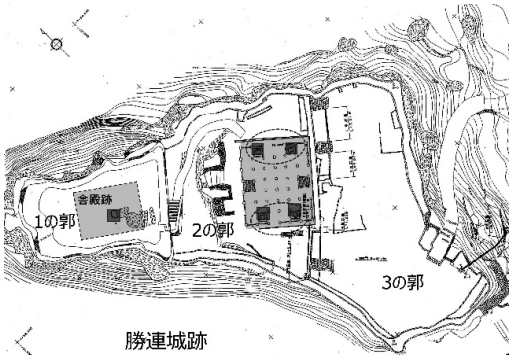
石組土坑の類型と時間軸の問題に続き、本節では、類型と機能・用途との対応関係をみたい（第２表）。床面ａの類型は、既調査報告書に掲載される遺構では生活残滓廃棄槽、水溜槽、便槽などに該当する。また、報告の記述では生活残滓廃棄槽と便槽の分別できない要素を指摘、複合的な使用を示している。床面ｃの類型は、床仕上げが不透水層にもつながる石敷のためであろか、水溜、肥溜槽、便槽の用途が登場している。床面ｄの類型は便槽としての用途に濃くみられる。この様にみると、グスク時代は不確定の要素が多いことから別にして、近世段階における生活残滓廃棄槽と便槽の区別は明確ではない事実が認められる。一型式一用途と特定されるものは近現代になる可能性が高い。明治以降（近現代）においては、同一空間において石組土坑が複数型式みられ点でも、基本的には用途を分けていたことを示唆する。

第２表　石組土坑確認された用途

床面	類型	生活残滓廃棄槽	水溜槽	肥溜槽（シーリ/フール）	便槽（ジョーフール）
ａ土	Ⅰ式〈正方形〉	○			○
	Ⅱ式〈長方形〉	○	○		
	Ⅲ式〈円形〉				
	Ⅳ式〈楕円形〉	○			
ｂ岩盤	Ⅰ式〈正方形〉				
	Ⅱ式〈長方形〉				
	Ⅲ式〈円形〉				
	Ⅳ式〈楕円形〉				
ｃ礫敷	Ⅰ式〈正方形〉				○
	Ⅱ式〈長方形〉			○	○
	Ⅲ式〈円形〉	○			○
	Ⅳ式〈楕円形〉				○
ｄ塗装	Ⅰ式〈正方形〉			○	○
	Ⅱ式〈長方形〉		○	○	○
	Ⅲ式〈円形〉				
	Ⅳ式〈楕円形〉				

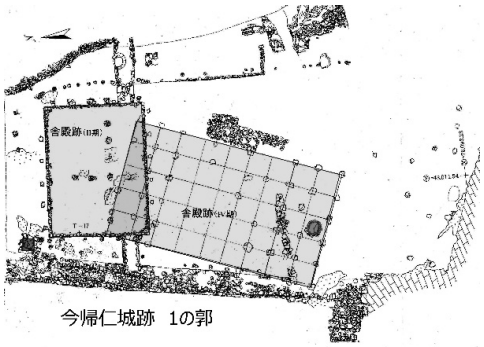
４）遺跡における当該遺構の位置

グスク遺跡や集落跡において確認される当該遺構を、とくに建物との位置関係からみてみたい。第２図に勝連城跡（付記３）、今帰仁城跡、首里城正殿跡、識名園御殿跡、玉陵東の番所跡、赤道渡呂



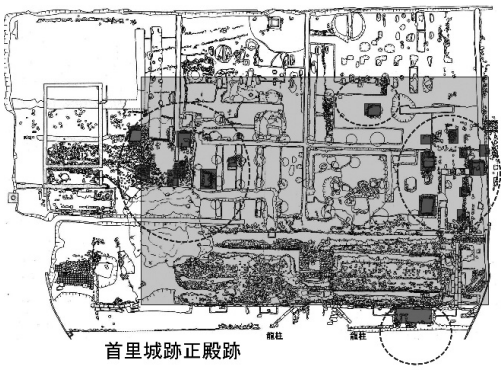
勝連城跡

1.



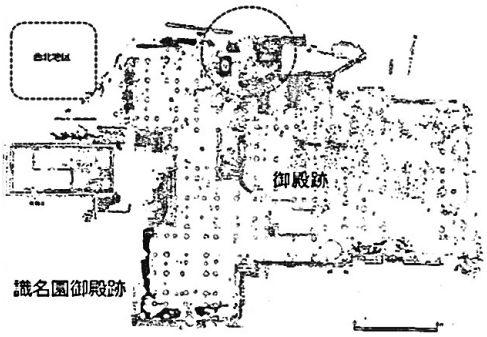
今帰仁城跡　1の郭

2.



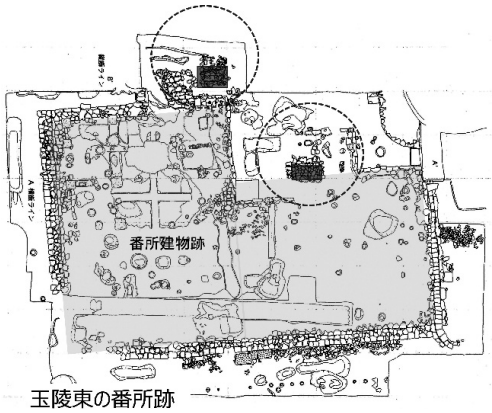
首里城跡正殿跡

3.



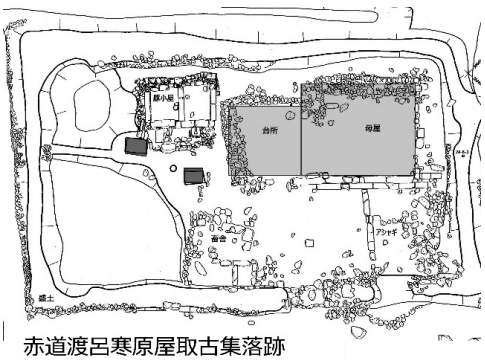
識名園御殿跡

4.



玉陵東の番所跡

5.



赤道渡呂寒原屋取古集落跡

6.

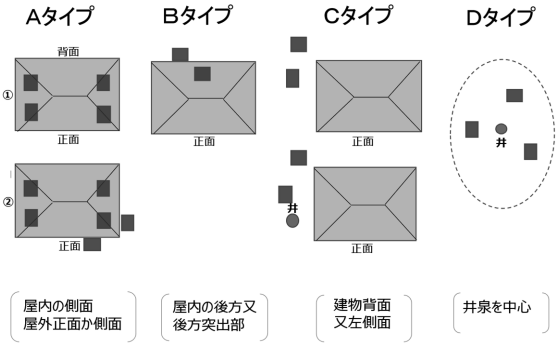
第２図　建物と石組土坑の位置図

1. 勝連城跡 1ノ郭. 2ノ郭　2. 今帰仁城跡 1ノ郭　3. 首里城正殿跡
4. 識名園御殿跡　5. 玉陵東の番所跡　6. 赤道渡呂寒原屋取古集落跡

寒原屋取集落跡、首里城跡跡歓会門・久慶門地区を取り上げた。この図では建物内における間取や、屋敷内における位置を意識するものである。およそ面的な調査を実施した遺跡から抽出した結果を模式化すると４タイプ（第４図）になる。

Ａタイプは屋内の側面か、もしくは両側に設置されもの、Ｂタイプは建物内の後方側（裏側）に配するもの。Ｃタイプは建物の後方一帯に位置するもの。Ｄタイプは建物との関連性よりは、井戸や湧水に近いもの。さらに前種以外のその他をＥタイプとする。基本スタイルは以上の４種類に分けられるが、二つのタイプを混合したものもバリエイションとして存在する。例えばＡタイプでは、①建物の外側正面分部にも存在するもの。②建物の外壁面に設置するもの。Ｂタイプでは、②屋敷内の井戸やフール（ブタ便所）を併置する例。Ａ、Ｃタイプが一つの郭に在る今帰仁城跡（第２図２）例がある。

第３図　石組土坑の位置図



第４図　建物と石組土坑の配置類型図

さらに集約を進めると、若干例外もみられるものの、およそＡタイプはグスクの基壇建物に認識される舎殿型、Ｂタイプは近世の王族、士族、その他関係施設にみる御殿型、さらにＣタイプは平民層にみる民家型、Ｄタイプは水場型とも呼べる。この類型の違いは、種類（機能）、地域、および社会的体制（身分、建物、敷地〈屋敷〉などの規制）を大きく反映しているものである。従って類型を歴史的展開（時間軸）でみるとＡ→Ｂ→Ｃと推移しつつそれぞれにバリエイションを生んでいる。なおＤはＢに平行しているものと理解される。

また、子細にみていくと、ＡタイプとＢタイプの間には、大きなギャップが認められる。石組土坑に対する配置の変化が、機能・用途の違いを示すのか、または、石組土坑に対する往時のヒトの認識変化を表していると捉えられる。

４　考察

１）石組遺構の機能・用途とその変遷

石組土坑はグスク時代の14世紀に始まり、近現代まで連綿と続く。その分布はグスクを拠点に王府関連施設、さらには平民層へと琉球諸島域に広く存在したと解される。これは大きな特徴の一つであ

る。また、機能･用途は現段階で明らかにされているのは、①水槽（汚水槽）、②生活排水処理槽（ミンタナシーリ：註64）、③便槽、④シーリ（肥溜：註65）・ゴミ廃棄槽等があり、居住空間における４タイプ（第４図）に分けられた。ただ、グスク時代のＡタイプについては、上記の機能・用途のみでは解しがたい部分を残している。つまり、Ａタイプの舎殿は按司の政治、外交、祭祀などのハレの場にあたり、広い空間を有すグスクからみると、あえて足下に臭気を伴う集積槽を設置する理由が分からない。あるいは全く別の機能・用途があるのではなかろうか。この謎とも言える土坑について、一案として調湿坑の機能を想定している。基本的には坑内に廃棄物の投入がみられない空中の坑という点を積極的に捉え、建造物および基壇の湿度を調整する目的の坑ではないかとみるのである。石組土坑の壁は雑石で目地は比較的粗く、底は地床で、透水性が保たれている。また、当坑の配置が傾向として、建物床の側壁側に近く、風通しを意識した配置と考えられるのである。ただし、これは一つの作業的な仮説であり、1年間を通した床下や土坑内の湿度調査を実施する実証実験が必要となってこよう。この床下の湿気対策については現代の住居建築においても課題の一つでのようで、関連研究の成果も蒐集、整理を必要としている。

なお、他に穴蔵や隠し部屋など何らかの倉庫的なものも思い付きとして上げられるが、上述の湿気と規模の条件を勘案するとモノを保存、保管、避難場には極めて厳しいものがあり、説として取り上げるには論理的根拠が遠いもとなろう。

次なる議論点は、Ａタイプの舎殿に上記①～④の機能・用途が存在したと認める場合である。そもそもの疑問は臭気に関する点である。つまり、グスク時代には、生活活動に伴う臭気が問題視されていなかったという仮定である。仮に無いとなればこの疑問は一気に瓦解することにもなる。つまり近世以降、顕著なものとしてＢタイプの様に石組土坑が建物内の奥や、その屋外に配置する動きとして捉えられる。建物の間取からみると玄関側は表になり、石組土坑側は逆の裏となっている。この設計の動きの背景には、廃棄物や匂いの発生を意識し避ける、即ち不浄なものとする観念がこの時期に始まるのではないかという考えに至る。この点は今後グスク時代と近世における生活文化の画期をなすカギを握る部分となるかもしれない。

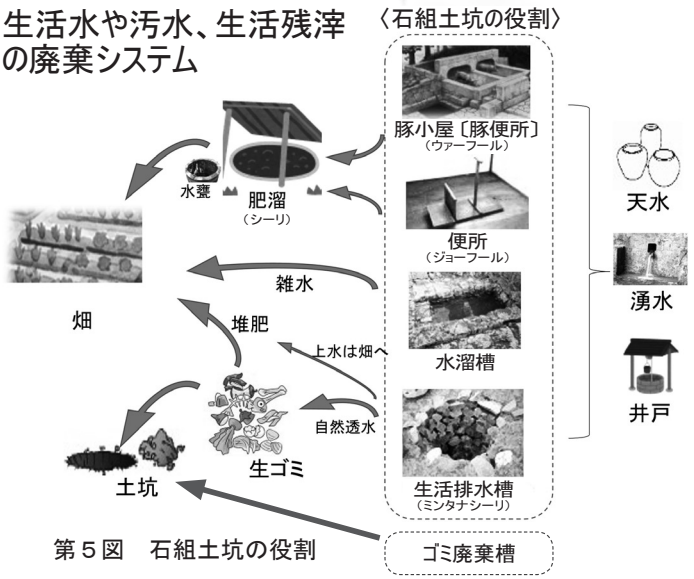
２）生活水や汚水の廃棄システム

石組土坑の在り方は、生活水や汚水の廃棄システムとして捉えることができる。つまり、琉球諸島は地形、地質の関係上、河川や池が少ない環境にあるため、水資源に恵まれていない地である。ことに内陸や丘に居を構え、農耕生産社会に移行するグスク時代以降にあっては、自ずと水の確保とその扱いには、生活の維持にも大きな影響を与えたに違いない。第５図で模式的に示すが、天水、湧水、井戸などで得られた貴重な生活水が、石組土坑（枡）を経由し如何に無駄なく台地にもどされているかをみることができる。

具体的にみていく。屋敷内の後方奥にみられるフールと称するブタ小屋に隣接する糞尿を溜めおく

槽である。家畜の飼育を兼ねながら人糞をためる装置が石組土坑である。フールの床レベルの溝で連結するものや、やや離れるようにして設けるものもある。また、関連して埋め甕が伴う例もある。一定期間おき熟成させた後に、甕の水で薄め（濃度と堅さ）堆肥として畑で使用される。

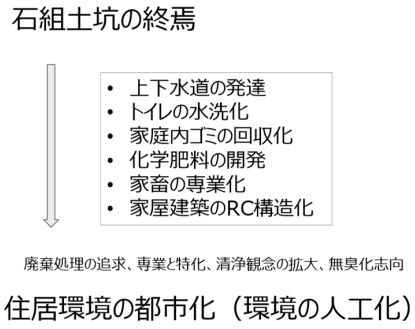
全方向から降る雨水などは、地上水を含めて水溜（石組土坑）に確保され、手足の洗い、道具の洗いとして利用され、その汚水が畑などで散布される。



第５図　石組土坑の役割

日常の家庭生活で出た野菜果物などの食料残滓など、処理水の溜め置く排水槽がもう一つのミンタナシーリ（石組土坑）である。槽の上水は畑に散布されることや、自然透水で処理されることもある。沈殿し発酵したものは肥料として畑へ、それ以外の無機物は新たな設けた土坑などに投棄され埋められる。また、民俗誌のシーリ（肥溜）より古い、近世の石組土坑にみる廃棄物処理施設がある。食料残滓や糞便、いわゆるゴミなど多様な廃棄物を混じた石組土坑が存在する。用途の分離化する初期の形態を示しているものと理解される。いずれにしても、水資源の脆弱な島嶼環境に必須の施設と言えよう。

さて、戦後は下水道の整備発達、トイレの水洗化、家庭内ゴミ回収化、化学肥料の開発、家畜の専業化、家屋建築のＲＣ構造化など、水を巡る下水、上水道などのインフラ整備で、石組土坑群の終焉を迎えることになる。近代化の促進で果てしない人工環境の創造なかで淘汰されるものである。



５. おわりに

以上、石組土坑の機能・用途について、研究の現状と課題を整理しながら、類型的検討と文化史的な意義について考えた。石組土坑は基本的には四角型式と円型式があり、坑の廃水性、不透水性の特徴を選択しながら、生活活動に供されている。ことに近世の廃棄物槽に関しては、食料残滓や様々なゴミ、糞便の混在する投棄槽の機能を有しているが、近現代以降では廃棄物処理施設とトイレ（便槽）となど分離が一層進められ、いわば処理システム化が展開している。この様に当遺構の機能・用途、

利用形態について大まかには掴めるまでになったが、理解が及ばない部分も多い。列挙すると、①石組土坑に伴出する土坑との関係（補完）の検証、②土坑の基本的な四角形と円形にみる系譜や違いの背景。③石組土坑の編年の確立のため年代確定や、伴出物の内容分析。④日本本土の香川県高松城跡（註66）、愛媛県湯築城跡（註67）、宮城県多賀城（註68）などの中近世の遺跡で類似遺構が認められ、彼我の関係を検討する課題などが残されている。

謝辞

資料検索において、内間靖氏（那覇市壺屋焼物博物館）、長濱健起氏（糸満市教育委員会）、金城りお氏（宜野湾市教育委員会）、大城一成氏（糸満市教育委員会）から助言や資料の提供を賜った。また、発掘調査報告書からの資料集成作業では、宜保黎也君（沖縄国際大学3年生）に多大な協力を得た。末筆ではあるが記してお礼を申し上げたい。

付記

付記1．2021年1月25日（月）『第213回シマ研究会』於：南島文化研究所で、発表テーマ「沖縄諸島における近世建物の〈石組土坑〉について」司会：崎浜靖氏、コメテーター：宮城弘樹氏の参加を得てオンライン方式で実施した。

付記2．筆者とほぼ同時期に検討を始め、先に筆者は研究発表を行い、やや遅れて太田樹也氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）が2021年4月23日付け『廣友会誌』第10号において、「沖縄の石組遺構の機能について」として、研究の現状と課題を丁寧に整理・報告されている。発表･報告時期がほぼ重なり、本稿研究史における文脈上、表記が難しため、付記というかたちで取り上げざるを得なかった。ご寛容願いたい。

付記3．筆者は勝連城跡１ノ郭に存する石灰岩の小穴を石組土坑の一つと解釈する。現在、当該穴は拝所の一つである。安里嗣淳は拝所としての利用形態は新しい段階であると判断する。グスク時代は当該郭には建物が存在し、当該穴の構成する岩塊の上面が整形されている点から、建物の下に位置していたことが考えられるとし、グスクと信仰施設との新旧関係を論じている。参考：安里嗣淳「グスクの中の拝所施設づくり」『南島考古だより』28号3頁　1983年

参考引用文献

註1．琉球政府文化財保護委員会『勝連城跡第一次発掘調査報告』1965年
高宮廣衛「勝連城跡の重要な考古学的調査」『守礼の光』96号 琉球諸島高等弁務官室1966年

註2．勝連町教育委員会「第4章二の丸舎殿建物及び南風原門調査」『勝連城跡環境整備事業報告書』1986年

註3．沖縄県教育委員会『歓会門・久慶門内郭地域の復元整備にかかる遺構調査』1988年

註4. 沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡』（Ⅰ）2001年、（Ⅱ）2002年

註5. 那覇市教育委員会『松山御殿跡』マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告　2002年

註6. 沖縄県立埋蔵文化財センター『御茶屋御殿跡』遺構確認調査報告書　2003年

註7. 沖縄県教育委員会『旧首里城正殿位置確認調査報告書』1986年

註8. 南城市教育委員会『島添大里グスク』都市公園計画に係る緊急発掘調査調査報告書（5）　2011年

註9. 那覇市教育委員会『湧田村跡』那覇市新庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告　2013年

註10. 那覇市教育委員会『天界寺跡』首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査　1999年、2000年

註11. 浦添市教育委員会『浦添城跡第二次発掘調査概報』1984年
浦添市教育委員会『浦添城跡発掘調査報告書』1985年

註12. 註2掲載文献に同じ。

註13. 名勝識名園環境整備委員会『名勝識名園環境整備事業報告書』1977年

註14. 註11掲載文献に同じ。

註15. 註7掲載文献に同じ。

註16. 註2掲載文献に同じ。

註17. 註3掲載文献に同じ。

註18. 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』 1991年

註19. 那覇市教育委員会『壺屋古窯Ⅰ』1992年

註20. 沖縄県教育委員会『カイジ浜貝塚-竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告-』 1994年

註21. 那覇市教育委員会『名勝識名園環境整備事業報告書』 1996年

註22. 宜野湾市教育委員会『喜友名貝塚・喜友名グスク』1999年

註23. 那覇市教育委員会『天界寺跡』首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査　2000年

註24. 沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡（Ⅰ）（Ⅱ）』首里杜舘地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査　2001年、2002年

註25. 那覇市教育委員会『首里旧金城村跡』個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査　2001年

註26. 那覇市教育委員会『松山御殿跡』マンション建設に伴う緊急発掘調査報告書　2002年

註27. 沖縄県立埋蔵文化財センター『円覚寺跡』遺構確認調査報告書　2002年

註28. 那覇市教育委員会『史跡　玉陵整備事業報告書』 2004年

註29. 那覇市教育委員会『首里旧真和志村跡』個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査　2005年

註30. 那覇市教育委員会『神応寺跡』繁多川公民館・図書館建設工事に伴う緊急発掘　調査報告書　2006年

註31. 那覇市教育委員会「首里旧大中村跡」『那覇市内遺跡Ⅰ』個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査　2007年

註32. 沖縄県立埋蔵文化財センター『渡地村跡』臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査　2007年

註33. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』黄金御殿地区発掘調査報告書　2007年

註34. 宜野湾市教育委員会『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』〔平成15 ～ 18年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業－普天間飛行場基地内－、赤道渡呂寒原屋取古集落遺跡範囲確認調査 赤道渡呂寒原洞穴遺跡範囲確認調査、宜野湾・神山シリガーラ流域古墓群分布調査 野嵩タマタ原遺跡西側平坦地範囲確認調査〕2007年

註35. 中城村教育委員会『新垣グスク』範囲確認に伴う発掘調査報告書　2007年

註36. 那覇市教育委員会「首里金城村跡」『那覇市内遺跡Ⅱ』個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査　2009年

註37. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』御内原北地区発掘調査報告書(1)　2010年

註38. 南城市教育委員会『島添大里グスク』都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(5)　2011年

註39. うるま市教育委員会『楚名村跡ほか』嘉手納地区（18～23）運動施設移転工事に係る文化財調査　2012年

註40. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡』県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(3)　2012年

註41. 那覇市教育委員会『渡地村跡』臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査　2012年

註42. 那覇市教育委員会『湧田村跡跡』那覇市新庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告　2013年

註43. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡』県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(4)　2013年

註44. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』御内原北地区発掘調査報告書(2)　2013年

註45. 中城村教育委員会『中城城跡』史跡整備に伴う発掘調査報告Ⅳ　2013年

註46. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』京の内跡発掘調査報告書(ｖ)平成6年度調査の遺物編(2)　2014年

註47. 那覇市教育委員会『小禄村跡』森口公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ　2014年

註48. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』銭蔵地区発掘調査報告書　2015年

註49. 沖縄県立埋蔵文化財センター『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書Ⅰ』普天間古集落遺跡　2015年

註50. 読谷村教育委員会『トリイステーションウガンヒラー南方遺跡文化財発掘調査』2015年

註51. 那覇市教育委員会「首里崎山村跡」『那覇市内遺跡Ⅳ』　2015年

註52. 北谷町教育委員会『平安山原Ｂ遺跡』2015年

註53. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』正殿地区発掘調査報告書　2016年

註54. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡』県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(5) 2016年

註55. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡(首里高校内)』首里高校校舎改築に伴う発掘調査 2017年

註56. 沖縄県立埋蔵文化財センター『東村跡』沖縄県立離島児童生徒支援センター建設に伴う緊急発掘調査報告書　2017年

註57. 沖縄県立埋蔵文化財センター『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4』普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡　2017年

註58. 宜野湾市教育委員会『瑞慶覧基地内病院地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書２』平成21～26年度 キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区内発掘調査　2017年

註59. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡』東のアザナ北地区発掘調査報告書　2018年

註60. 沖縄県立埋蔵文化財センター『中城御殿跡』県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(6) 2018年

註61. 沖縄県立埋蔵文化財センター『神山古集落』普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書　2019年

註62. 沖縄県立埋蔵文化財センター『大嶺村跡』那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　2019年

註63. 仲座久宜「シーリ遺構から見る御内原のくらし-平成19年度首里城跡御内原北地区発掘調査から-」『紀要沖縄埋文研究』第6号　沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年

註64.『那覇市史　資料編　第2巻中の7　那覇の民俗』1979　201頁

註65. 国立国語研究所（編）『国立国語研究所資料集5　沖縄語辞典』六刷　1980年471頁

註66. 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター『高松城跡』(西の丸地区)Ⅱ　2003年

註67. 愛媛県教育委員会『湯築城跡』道後公園埋蔵文化財調査報告書　2002年

註68. 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－発掘のあゆみ 2020 －』2020年

Characteristics and Changes of "Stone Pit" Associated with Building Feature in the Ryukyu Islands

Shizuka UEHARA

Abstract

This paper deals with the characteristics of stone pits from the Gusuku Period to the later modern period in the Ryukyu Islands, referring to their functions through all the features from all periods. First, names of the features are sorted out, and considering the research history, the typological examination lacking in the previous studies is conducted. Then, sixteen types are classified based on plan shapes by associating with the processing of the bottom and wall surfaces related to the use and function. Finally, the chronological changes of the four types are identified, and the emergence period and changes in function are clarified. As for the functions, new insights such as the moisture control pit under the floor of the building are assumed, and the room for future study is explored. By correlating the changes in the location of residential areas with the development of inland areas due to the acceptance of agriculture after the Gusuku Period, and the poor water resource environment in the central and southern Okinawa Islands, stone pits can be positioned as a water utilization system or fertilizer recycling system, and changes in functional differentiation can be captured. Furthermore, the cultural historical significance that the features appear in the Gusuku Period and disappear during postwar urbanization is discussed.